

漢詩人吉田東伍

——『國朝詩綜』と『松雲詩草』——

池澤一郎

吉田東伍博士（一八六四—一九一八）は、『大日本地名辭書』の編纂者にして、『倒叙日本史』の著者として知られる稀代の歴史地理学者であるが、文藝面にも意を注がれ、『世子六十以後申樂談義』『世阿弥十六部集』の校注など近代能楽研究の鼻祖としても名高い。極めて多方面に亘る吉田博士の研究活動の中において、従来ほとんど等閑に附せられて来たのが、漢詩作者としての側面である。本稿では竹本幹夫教授が継続されている新潟県新潟市大鹿にある博士の旧居、吉田文庫の蔵書、原稿群の総合調査に一日筆者も参加を許されて、吉田博士の漢詩研究についていささか知る所があつたのを報告するものである。吉田文庫関係の各位と竹本教授のご厚意に深甚の謝意を表する。

吉田博士の漢詩研究は、漢詩の実作と分ちがたく結びついている。漢詩人が誰しも歩を進めた階梯なのであろうが、過去と同時代の中国と日本双方の漢詩作品を読んで楽しむことが昂じて、やがて自らも漢詩を作りたいという衝動に駆られて実作を手掛けるのが日

本の漢詩人の常道であつた。漢詩にさまざまな題材や詩形があることを知ると実作と研究とが並行して行われる。漢詩の題材も詩形も多岐に亘るし、吉田博士が活躍した明治、大正という時代は日本において三都は勿論のこと、吉田博士の生地新潟にも綺羅星のように優れた漢詩人がいたので、そうした先輩知友への憧憬がますます実作と研究とに拍車をかけたのである。身近かな親族に実兄旗野廉堂（『北越詩話』卷十「旗野餘」に略伝と詩の評有り）、一青がいて、叔父には旗野櫻坪があつて皆漢詩を善くした。

現在の漢詩の研究者は、ほとんどが唐宋の漢詩を基準として、その規格韻律語彙を調査することから始める。これは漢詩を外国文学としてのみ扱おうとする近代的な学問分野の細分化がもたらした現象である。しかしながら、この「科学的な」区分意識がもたらした、邦人撰に係る漢詩文を日本文学の領域からも中国文学の領域からも排除する結果もたらされた現状は、日本語にとって利よりも害が多きを占めることとしなくてはならない。漢字、漢語の備える表意性

や典故の思想は、邦人の記した漢詩文においてより身近なものとして習得できるのであるから、日本語において漢字、漢語の使用を廃さぬ限り、日本漢詩文を現在のように閑却することは近代科学思想の弊害のひとつと断じてよいであろう。

ところが吉田博士の生きた時代は、同時代を含めた日本の漢詩人への関心が唐宋の大詩人に比肩するほどに熾烈であった。研究と実作の手法との両面において、日本の漢詩に注がれる情熱が唐宋のそれをはるかに凌駕していた観がある。日本に居て日本で起る諸現象を詩に詠じるのであるから、時空ともに隔絶した唐宋の詩人よりも、江戸時代を超えて漢詩文への愛好の趨勢が高まった明治中期に活躍した日本の漢詩人のほうが、実作への意欲を刺戟したことは火を見るよりも明らかなのである。吉田博士が編纂を志して果たせなかつた日本漢詩の詞華集たる『國朝詩綜』の、吉田文庫に今日残る草稿において、同時代、明治期の漢詩人の作品がその過半を占める所以である。

一、『國朝詩綜』

『吉田東伍博士追懷録』（大正八年刊）によると吉田博士は、明治十五年（一八八二）数えて十九歳の頃、歴代の邦人の漢詩集『國朝詩綜』編纂を志したという。吉田博士の漢詩に関する記述として逸せないのは、五峰坂口仁一郎（一八五九〜一九二三）の記した『北

越詩話』（大正八年刊）卷十「吉田東」の項と右『追懷録』に坂口が寄せた「吉田君を憶ふ」の中の次の一節である。

君の聰明は往くとして可ならざるなしで、何につけても悟入が早く随分多方面に涉つて居る。中にも私の敬服したのは君の漢詩に於ける伎倆である。君の令兄廉堂一青二君及び令叔櫻坪君も俱に詩を作つた人だから、君も耳濡目染自然詩に興味を有つようになつたであらうが、私は君と交はること廿餘年、君が詩を作ることを知らずにゐた。然るに六七年前偶然松雲詩草を示され、始めて君が特異の才に驚いた。松雲詩草は君が弱冠の頃から廿六七歳即ち北海道を去るまでの作である。初めは令兄か令叔かに就て詩法を聞いたであらうが、其後誰を師としたといふでなく、眞に所謂寒郷の獨學で養ふ所は知るべきものである。然るに其作品に至つては遙に令兄令叔を凌ぐのみならず、往々専門詩人に譲らざるものがある。中にも金陵行の一篇は其最なるもので筆力といひ聲調といひ巖海珊の風骨ありとも謂ふ可きものである。尤も君の長所は古體第一絶句之に次ぎ、五律七律又之に次ぐといふ順序だが元來律詩は聯を主とし、多少の技工を要するから習熟すれば却て作り易い傾もあるが、初學には入り難いものである。君の律詩はまだ技工の上に缺くる所があるまで、習熟したなら或は絶句の上に出るかも知れぬ。要するに諸體兼備したもので現に私の北越詩話には二十首ばかり採録して居るが、近時の作家中優に有數の部に入るべきものである。

私は之を採録するに當り伊藤香草君と取捨の相談をしたが、香草君も金陵行の伎倆に敬服し、獨學で博士になるやうな人は何につけても異なつたものだと思稱された。若し君が始めから詩を専門にしたならばただけでも優に一家を成せるのである。賢者洵に測る可からずとは實に君の如きものを謂ふのであらう。

『北越詩話』卷十「吉田東」の項は長大なものだが、幸い平成二年に国書刊行会から復刻版も出ていて、普及しているのついでに見られたい。ただここには『國朝詩綜』編纂の事に関わつて次の一節を見ておくこととする。「胞弟高橋檀堂曰く、少時、洛城（吉田博士の号）の時時詩を鈔せるを見る。堆積二三百紙。遺篋を検すれば其の稿已に散逸すと雖も猶ほ二三十紙あり。題して日本詩綜といへり。則ち其の夙好を見る。然かも寒郷の獨學。養ふ所知る可きのみ」と。右の坂口の文章では『國朝詩綜』が『日本詩綜』となつていて、名称を異にする。今回、吉田文庫のご厚意で、博士の自筆草稿の束を拝見することができたが、そこには『國朝詩纂』、『皇華雜纂』ともあつた。いずれも日本人の漢詩の選集という意味となるのだから、完成の暁にどの書名にするか、博士は思い楽しみ、かつまどわれていたのであらう。

吉田文庫の『國朝詩綜』の束には、紙縫り綴じの薄い写本と大小さまざまな大きさの和紙を細断した短冊様のものがあり、『北越詩話』卷十の高橋檀堂の「二三十紙」を遙かに凌駕する。むしろ、小さな短冊をも一紙と数えれば「二三百紙」と見なせなくもない。

ほとんど「散逸」することなく今日に伝えられたのかも知れない。先述したようにほとんどの紙には明治期の漢詩人の作が一人につき、一首から十数首抄出されているのであるが、紙縫り綴じの半紙本大の写本の中に「書籍目」という一冊があつて、総集別集を区分することなく、古代から近世に至るまでの邦人の漢詩集の書名が列挙されている。今その書名を吉田博士が冊数や著者名を併記されているものはそれをも含めて列挙する。

古代ノ部	懷風藻	一冊	文華秀靈集	一冊		
經国集	四冊	朝野群載	廿一冊	都氏文集	一冊	
性靈集	十冊	野相公集	橋在列集	本朝無題詩	三冊	
本朝文粹	七冊	本朝續文粹	十三冊	蒙求文句	三冊	
江吏部集	一冊	善相公集	源順集	濟北集	四冊	
梅花無盡藏	二冊	翰林葫蘆集	六冊	五山僧詩集	一冊	
宣華詩	五冊	扶桑集	一冊	本朝麗藻	一冊	
京花集	十冊	葫蘆詩文集	十三冊			
梅花無盡藏句集	八冊	本朝詩英	一冊	草山集	十冊	
東海瑤華集	七冊	文化風靡	二冊	千歲佳句	二冊	
翰林五鳳集	十五冊	後水尾帝御製詩集	一冊			
源氏物語詩	一冊	湯山千句	二冊			
後光明帝御製詩集	一冊					
林氏	羅山	向陽	鶯峰	梅洞	讀耕	鳳岡
千材一葉	二十五冊	山跡七字城	二冊	來千里集	五冊	

全 詩集 四冊 尺五堂集 二冊 白石詩草 一冊
白石遺稿六冊 白石余稿 三冊 觀瀾集 十冊
錦里文集 十冊 紹述文集 十五冊 葛廬集 二冊
退省詩集 一冊 管春錄 五冊 活所蒿 一冊
遺蒿 六冊 詩文集 一冊 蹈海集 七冊
倚蘭臺集 十七冊 春台集 廿十冊^マ
水戸館撰詩集 四十二冊 全 文集 八十二冊
舜水文集 三十卷 常山文集 三十卷
古学 仁齋詩集 二 東涯詩集 十
扶桑名賢詩文集各七冊 平安林義端集 南郭文集 二十七冊
寬齋七五絶 六 全唐詩逸 二 日本詩紀 五十
寬齋百絶 新編覆醬集 石川凹 十四冊 松羅館詩集
北肉稿 惺窩集 十 羅山詩集 七十五冊 鷲峰詩集
勉亭詩集 四 羅山 鷲峰 讀耕 鳳岡 向陽
嚶鳴館詩集 細井平洲 三冊
原狂齋 名公逸 戸崎淡園集 大東古今詩傳
豊氏詩草 豊嶋由己名幹字小卿 芸閣文集
麗澤詩集 岡崎廬門 平安風雅 同人 本朝律詩選 同人
本朝絶句選 同人 暢園詩集 岡田新川名挺之
歷代詩選 五 本朝詩仙抄 六 高橋護嶋名閔慎字正卿
皇朝正聲 荻生徂徠 徂徠集 自一至七詩部 二十冊
金谷文集 荻生大寧 静齋詩稿 川口光遠

紫芝園前後稿本 大宰春台 梅龍遺稿 武田欽鷄
金蘭詩集 草廬 二 草廬詩集 九
日本詩刪 鶴臺遺稿 一 爽鳩遺稿 二
大峰詩集 中村蘭林名明遠字子晦 寬齋遺稿 五
魯堂東湖稿 一 藤樹仙士遺稿 二冊 江西文集
大湫集 儼塾集 森尚謙 十 省庵遺集 十二
市隱草堂集 十一 玉山詩集 六 平山遺稿 六
東江詩草 澤田鱗 一夜百首前後篇 二
咏物集 南海 鍾秀集 楊齋 中村欽 十三
淡淵集 中西 筌蹄集 中根 林塘集 人見卜幽
玄圃詩集 大江資衡 五 髮宝山人集 諸葛氏 十五
情怕齋集 十 橘窓文集 雨森翁
薔薇館詩 芥川丹丘 三 琴所稿刪 澤村
宮内 南海詩集 一冊 鏡花水月集 南海
鹿鳴館集 南海二 常山樓文集 五 龍門文集 廿四
釣虛詩集 一 鳩巢文集 四十六 遯庵詩集 六冊
金峨文集 七冊 存一稿餘花時編 芝山著 八冊
東風詩集 大田南畝 一 觀光集 大田南畝 一 錦城百律
垂加文集 升堤園詩話 今戸全都雜詠 日本詩史 北海
梅園詩集 淇園詩集 同詩話 荷楓稿 村井中衡
明清稿 熊耳文集 大内 十三 詩聖堂詩集 三篇
詩集 卜居北征西遊再西遊百絶 周南詩集

観瀾詩集 松崎堯臣 北海詩鈔 同統篇 日本詩選
 六如詩鈔 草山集 元々唱和集 鳳潭 小雲棲稿 大典
 大典咏物詩 昨非集 北禪詩草 松浦詩集 西溟餘稿
 雜弄集 性無集 自然適稿 八
 北禪遺稿 玉壺詩稿 四冊 東野遺稿 一冊
 彩岩集 一冊 幽客餘稿 二十冊 宜園百家詩 八冊
 本朝一人一首 二冊 文久廿六家絶句 二冊 日本詠物詩
 金蘭集 二冊 日本詩選 十一冊 本朝詩英 五冊
 歷朝詩纂 英蘭翁語 金華稿刪 蛻巖集
 栗山堂詩集 詩家絶唱 撰西六家詩選 江都名家詩集
 今世名家詩集 近世名家詩鈔 熙朝詩薈 本朝高僧詩集
 扶桑千古詩 歷代名媛詩鈔
 右は匆卒の間に原本から書き取ったもので、書き損じ、書き落しもあるかも知れぬが、懐風藻から幕末に至るまでの版行された歴代の漢詩集の書名であることは理解される。吉田博士もすべてを實物について記されたものではなく、伝聞による記述も含むことは、書名に正確ではないものを含むことに知れる。林家の羅山 向陽 鷲峰 梅洞 讀耕 鳳岡という記述や人名のみが記されている項からは、それぞれの人物に詩文集があることを吉田博士が知って、その調査を渴望していたことを示しても、この「書目」執筆の蔡には寓目するに至らなかったことを窺わせる。また多くは個人の詩集（別集）であるが、複数の、あるいは歴代の人物の選集（総集）を

漢詩人吉田東伍

も挙げていることに、博士が日本漢詩の総集を集めて、自らの『國朝詩綜』の規模や体裁、内容構成をいかなるものにしようかと模索されていたことが推察されるのである。『日本詩選』や『熙朝詩薈』はその意味でも着目される。最後に『歴代名媛詩鈔』があるが、博士が女性漢詩人に着目していたことは、あまたの短冊様の草稿の中に、鱸采蘭・張紅蘭・原采蘋・多田季婉・大沼芳樹・跡見花蹊・松村小蘋・奥原晴湖・若松薰子等、閨秀のものが少なくないことに窺い知れる。博士が抄出の対象とされた日本漢詩集は右に止まるものではない。吉田文庫には少なからぬ近世から明治期に刊行された漢詩集の版本が所蔵されるが、それはほとんどが右の書目とは重ならないのである。

その一端を左に掲げる。順序は寓目するままで、刊行順ではない。

嚶々詩鈔（菊池九江） 枕山詩鈔初・二・三編 鴻爪詩集
 良齋詩略 湖山樓詩鈔 錦城詩稿 小山堂詩鈔
 湖山樓詩屏風 湖山樓詩稿 徂徠集 學則
 安政廿二家絶句 文政十七家絶句 文政十七家絶句
 文久廿六家絶句 湘雲瓊語 溪琴山房詩 画乘要畧
 異称日本伝七冊 梅花無盡蔵三冊 撰西六家詩鈔五冊
 黄葉夕陽村舎詩後編四冊 梅墩詩鈔初・二・三・四各三冊
 遠帆樓詩鈔（恒遠和子達） 韻牌 吳船録・入蜀記
 昔々春秋 四聲解環 新撰字鏡 月瀨紀勝
 皇都名勝詩集 今四家絶句二冊 北道遊簿二冊

東瀛詩選十二冊 古銅餘韻集二冊 日本政記

詩聖堂詩集初編三冊・二編四冊。三編二冊

越中古今詩鈔(大正十五年) 訓点復古 新潟繁昌記

六如菴詩鈔遺編三冊 北海詩鈔

五山堂詩話卷一〜十(缺卷五) 寬齋・詩仏・細菴百絶

右の中、『梅花無盡蔵』『徂徠集』『詩聖堂詩集』『六如菴詩鈔』『北海詩鈔』『撰西六家詩鈔』は、既に「書目」にも挙げられていたが、他は見えないものばかりである。博士の「書目」はその漢詩研究が広がりを見せるにつれて、どんどん拡大していったことが知れ、やがてその際限なき拡大の事実気づいたことが『國朝詩綜』編纂が中途で放棄された原因であったかも知れない。中に就いて広瀬旭莊の『梅墩詩鈔』全十二冊が全て揃っているのが目を惹いた。いうまでもなく広瀬旭莊は清末の鴻儒曲園愈樾が「東國詩人の冠」として、日本漢詩史上最高の詩人と認定した存在である。そして愈樾がその評を記した日本漢詩集こそが吉田文庫にも所蔵が確認される『東瀛詩選』であった。

「書目」とそれに見えぬ版本とさらに人から写本、版本を借覽したり、新聞雑誌に掲載された同時代の漢詩人の作品が『國朝詩綜』の取材対象であったと思われる。

『北越詩話』の指摘通り博士の原稿の多くが「散逸」しているとすれば、全豹の一斑を卜することしかできないが、今回の調査で書き取ったままに、作品とともに録された近世から明治にかけての詩

人たちの名前を列挙しておこう。寓目するままに書き取ったもので、時代順には並んでいない。先述した関秀のものは重複を避けた。

阪谷朗廬	長三洲	森春濤	永坂石埭	森槐南
各務湖玉	小野湖山	岡本黄石	広瀬青村	広瀬林外
巖谷迂堂	田中芹坡	中川香堂	森鷗村	川嶋梅坪
末松青萍	中村敬宇	芳野櫻陰	頼杏坪	神波即山
杉浦梅潭	三村武五郎	熊谷三村	股野藍田	
関根癡堂	白川琴水	小原梅坡	飯田霞邸	秋場桂園
服部樂山	春田九臯	蒲生修静庵	小田穀山	
石川荆山	三輪葦翁	間野可亭	猿橋甲州	秦 星池
藤田東湖	木下錦里	梯 隆恭	江 鈍久	中村仏庵
中嶋棕隱	藤 琢斎	西 雪莊	島 梅外	僧 天蓮
瀧川南谷	中村聖窓	匹 松塘	道士愛蓮	忘 若氏
永山支軒	高橋一峯	高橋白山	岡本斯文	勝 海舟
杉 聽雨	平田虚舟	野口松陽	蒲生重章	北川吞溟
宍戸碧海	広瀬雪堂	青木茂一	杉山三郊	日永 邊
宮原潜叟	大塚孤山	中村三蕉	松平確堂	中綱漢山
白賁道人	本田種竹	平山省翁	助田改亭	田中頼庸
神田香巖	股野子玉	岩崎秋溟	菊池三溪	大沼湘中
小永井丘山	東陵居士	山田永年	青木成一	
柴原綽廬	奥井春永	池尻芝洲	大郷 穆	鷺津毅堂

藤沢南岳	片山沖堂	南河近藤	坪井錦丞	北栗憲一
長岡懐山	磯山子克	淇堂処士	山本醇堂	千和老圃
伊村柳虚	白川船山	河野春駘	上 夢香	石川秘所
升内東仙	坂口五峰	蠡湖正宰	中村近江人	
中村樸堂	(淳 伊勢人)	龜洲長寿	奥井寛筑	(阿波人)
藤井柴水	(勲 尾州人)	川上修斎	水野龍村	杉村梅園
秋野田鷹	市川中山	谷口藍田	栗原三径	
山村恒園	(醇 信州人)	浜村薇山	(大漣)	芝麓
倉木樸山	蒔場芳南	星 秋	並木栗水	服部五松
岩村礫水	海内老田	(果 越中人)	宮島栗香	佐川聖所
土岐支山	井上春漁	杉村遠州	村樸窓	岩溪裳川
伊藤聽秋	石津灌園	川口江東	井上樹塘	
野口小巖	(水戸人)	副島種臣	松岡毅軒	(時敏)
多田 東	山田稻東	源順	大江匡衡	齋藤拙堂
吉田了以	吉田素庵	戴曼公	鶴飼石斎	鶴飼鍊斎
鶴飼称斎	三宅道乙	向井靈蘭	菊池耕斎	田 止邸
劉 東閣	佐々十竹	柳川震澤	松下西峰	松下真山
羽黒養潜	栗山潜峰	鳥山芝軒	原 雲溪	林 道瑩
阿部 将	松浦霞沼	土肥黙翁	土肥霞洲	田中冠帯
陶山鈍翁	向井滄州	杉山蘭谷	平 東海	桑原空洞
関口黄山	田 大観	若林寛斎	木 蘭臯	田 臨川
松崎白圭	松崎観海	服部梅園	服部栗斎	石 筑波

孔 生駒	多胡柏山	林 榴岡	多胡松江	富永滄波
多田東海	滕 鳳楸	根 武夷	福 松江	服 蘇門
滕 水晶	河野恕斎	後藤芝山	山 兼山	高 芙蓉
宇井黙斎	平賀鳩溪	片 北海	立松東蒙	千葉芸閣
内田頑石	赤松滄州	吉 篁墩	阪本天山	西山拙斎
松下真山	源 琴台	林 述斎	岩崎桂堂	仁科白谷
菊池溪琴	岩垣松苗	頼 鴨厓	嵩 古香	片桐直方
村山 椒	松岡古春	三橋悔遲	勝間田忠	堤 南海
佐瀬 恒	丸山溟水	积 古梁	原 古処	重野子徳

明治漢詩壇を牽引したような大きな存在から地方の名士に至るまで、さまざまな同時代の漢詩人の作品を博士が抄出されていたことが分かる。現代においては、得てして邦人の漢詩文は江戸時代の終焉とともに凋落し、明治期には西洋化一辺倒であったかのように錯覚されるが、吉田博士の右の漢詩抄出が如実に語るように、明治期に漢詩を嗜む人は、前近代のものよりも、明治期のものを優先して学んでいたという実情があった。日本近代文学研究はこの実情をほとんど無視する態度の上に成り立っているのである。

『國朝詩綜』の草稿の束には、このほかに『元遺山詩』、『高青邱詩』、『金詩鈔』があり、それぞれに二十首から六十首程度の詩が抄出されている。これらは「國朝」の詩人ではないので、詞華集編纂には関与しない研究対象であったわけであり、その研究範囲が唐宋に止まらず、金元明清に及んでいたことが推察される。清詩ということ

では、吉田文庫の版本が一括されているものの中に、博士の自筆写本『清十家絶句』がある。第一丁表に「清十家絶句 錢牧齋 吳梅村 王漁洋 朱竹垞 查初白 黃莘田 王夢樓 袁簡齋 蔣藏園 趙甌北」とあるから、「十家」の詩の中から好尚にかなったものを抄出したものである。博士が閲覽されたのは、「嘉永六年癸丑二月下谷池之端仲町通御數寄町 江戸書林 岡村屋床助」と奥書があり、樂山服部孝編輯、大沼枕山閱批の和刻本『清十家絶句卷之上（下）』二冊本である。原本では「十家」一人につき、三十五首から五十六首の七言絶句総計四百三十二首を収載するが、博士はそこごく一部を抄出された。例えば、冒頭の錢牧齋は四十四首の中、三首を服部樂山が記した詩人の略歴とともに書き抜かれたのである。ところが、博士の自筆写本は和刻本の抄出で終始してはではなく、後半部には市河寛齋の「北里歌」十一首、柏木如亭の「吉原詞」二十一首、中村仏庵の「北里歌」五首、菊池五山の「続吉原詞」五首が書き抜かれている。これらは版本『北里歌』『崑岡炎餘』『詩本草』と写本とで流布したもので、これだけでも個人で集成するのは容易でなかつたはずである。いずれ当時の新聞雑誌などでこれらを集成したものがあつたこととは思うが、未だ確かめることは出来ない。

吉田博士が『國朝詩綜』編纂を志して、どのような作品を抄出されたかは、その歴史地理学者として大をなされた側面から照らす限りでも興味が尽きないところであり、博士の草稿のすべてについて分析が施されるべきであろうが、今回は序説として以下に二首を紹

介するにとどめる。一は明治初期の啓蒙家、教育者として名高い中村敬宇の「書感」と題する古詩であり、一は狂歌師として知られる蜀山人大田南畝の「三嶋驛遇関叔成南紀還」という七絶である。

何物唱征韓、非愚則狂耳。我欲曉其人、使自知其否。敵小不可侮、古人謀猶是。勿利隣國難、其言亦可採。范文勝敵懼、遠識炳千載。秦伯不勞師、遂能并四海。十年十一戰、宋殤斃其罪。徐偃崛起雄、不旋踵走死。古今尙德者、國運可隆起。尙力而好戰、亡滅立至矣。部婁生松柏、其根必衰餒。智小而謀大、鮮不速危殆。吾願秉鈞者、培國固根柢。積厚勿驟發、靜養以久待。寧容難忍辱、勿致莫及悔。天鑒自昭昭、內省宜克己。反觀我國事、滿目多可耻。吁彼何心哉、征韓誣不已。

明治六年（一八七三）に沸騰した征韓論批判の詩である。敬宇の学は經史子集を貫くから、主として中国史に照らして、朝鮮侵攻に異議を唱えるような議論を事とする右の漢詩を賦しうるのである。偏狭なジャンル意識に囚われて漢詩を歴史や思想哲学の研究資料から除外せんとする輩は、かかる時事批評詩を熟読しなくてはならない。そのような学問のセクシヨナリズムとは隔絶する存在であつた吉田博士が『日韓古史斷』で歴史学界に盛名を馳せたのは遙か後年の明治二十六年（一八九三）の末、三十歳の時の事に属する。日本と朝鮮とを古代よりの善隣国と規定する右の書物の著者にとつて、敬宇の「書感」詩は満腔の共感を以て筆録されたものと思う。

中村敬宇の刊行された詩集『敬宇詩集』卷之三「礫川集」冒頭に

見える詩である。詠い出しからふるっている。「何物ぞ征韓を唱ふるとは、愚に非ずんば則ち狂なるのみ。我其の人を暁さして、自ら其の否を知らしめんと欲す。敵小なれども侮る可からず、古人謀りごと猶ほ是なり。隣国の難を利用する勿れ、其の言も亦た採る可し（何というつけものか、征韓論を唱えるとは。愚人でないとしたら、狂人であろう。わたくしはその人に論して自らの非を悟らしめたい。敵が小国であっても侮つてはいけないとした、昔の人の深謀遠慮は正しい。隣国が難儀している時にそれを利用してはならないという言葉にも真理があるであろう）。続いて、北宋屈指の名臣范仲淹が軍を統べる地位に立った時、西夏に侵攻しない方策を執つたことを「千載に炳かがく」「遠識」だと讃え、周の王族の一人で呉を興した泰伯が、武力を使わずに荆蛮の諸族を帰服させたことを讃える内容が続くが、省略に従う。しかし、末段で展開される他国に干渉するよりも徳治主義を以て内政に専念せよという敬字の理想主義が、博士の共感を博したであろうことは確認しておきたい。

大田南畝については略歴も漢文で記されている。曰く、「名覃字子耜東都人幼従内山賀邸松崎觀海學詩學識最精古今典故所著有杏園詩集（名は覃。字は子耜。東都の人。幼くして内山賀邸松崎觀海に従つて詩を学ぶ。學識最も古今の典故に精し。著す所に杏園詩集有り）」と。南畝の狂歌・狂詩に一切触れず、その考証隨筆の妙と詩について暗に讃えるのが、吉田博士の見識の高さを示す。七絶は「三島道中に関叔成の南紀自り還るに遇ふ」と題するもので、南畝

が享和元年（一八〇一）に大坂銅座に詰めるために東海道を西に向かう道中で、旧友の紀州藩士菊池衡岳と駿州三島宿で遭遇した喜びを詠じたものである。本詩は日本大学図書館に蔵される『南畝集』十二には収められるが、刊行された『杏園詩集』『続杏園詩集』には見えない。博士はここでこの詩を見られたのであろうか。詩は「東去西来思ひ万重、途中蓋を傾けて相ひ逢ふを喜ぶ。行々三島を過ぎて仙客の、紀南熊野峰自り来るを見る」というものだが、「思ひの万重」たるを具象化するのに当たって、「三島」という地名に、蓬萊・瀛州・方丈の仙界三島を掛けて、紀州熊野という古来徐福が秦始皇帝の命を帯びてやってきたという伝承で名高い土地から江戸に戻る衡岳を「仙客」に擬した趣向が印象的である。吉田博士は南畝の日本の地名に関する造詣を瞬時に七絶に織り込んだ手際に興じて之を録したのであろう。

二、『松雲詩草』序文について

『松雲詩草』は大正二年（一九一三）に私家版として刊行された吉田東伍博士の自選漢詩集である。明治十三年（一八八〇）十六歳の時から、明治廿四年（一八九三）二十七歳の時に上京して読売新聞社に奉職するに至るまでの約十年間の詩藻である。博士は五十の誕辰に知友に之を配布するに当たって、数年前から準備して、旧稿を整理している。吉田文庫に所蔵される写本『松雲小稿』と草稿本

『松雲詩草』とにつけば、その整理過程を辿ることができる。後者の表紙には「五峰詞宗文壇下／請嚴正／庚戌十月初五／弟／吉田東伍／拜」と博士の筆で認めてある。庚戌は明治四十三年（一九一〇）である。先に引用した「吉田君を憶ふ」において五峰は、博士逝去の大正七年から遡ること「六七年前」と回想していたが、明治四十三年ならば更に二年ほど遡った時に、五峰は既にこの『松雲詩草』草稿を一閲したこととなる。「吉田君を憶ふ」にも『北越詩話』にも、吉田博士の漢詩に対する五峰の具体的な批評の言が見えたが、この草稿に加えられた朱筆を読むと、それらの批評の言を裏付ける一の事例を拾うことが出来るのである。節を改めて説くが、五峰の批評の言は、漠然とした印象によって記されたものでなく、博士の作の逐一に即してのものであったことが理解され、かかる五峰の漢詩批評家としての誠実が他の詩人においても貫かれているとすれば、『北越詩話』は質量ともに近代詩話の白眉といふこととなる。

ここでとりあげるのは『松雲詩草』の冒頭に掲げられた「松雲詩草引」である。これには末に「明治三十三年庚子秋日 故舊同人識」とあって、あたかも博士の知友が記したかの如き体裁をとっているが、五峰に「嚴正」を「請」うた『松雲詩草』の草稿（以下草稿と呼ぶ）の冒頭にも掲げられているから、博士が自ら認めて韜晦したものだと断じてよいであろう。しかし、草稿には詩本文に縦横に朱筆が加えられているのに、「引」には全く朱が見えない。五峰は詩では自負する所があったが、文においては博士の力量に一目置い

ていたのではないか。しかしながら、『松雲小稿』の「松雲詩草叙」と草稿の「松雲詩草叙」とは、ほぼ同内容であるが、刊行された「松雲詩草引」との間には、少なからぬ違いが認められる。「叙」が「引」とされる過程で、五峰ならぬ別の人物が意見を加えたか、或いは博士自身の推敲によるかして改稿されたのである。

刊本の『松雲詩草』には「松雲詩草附録」があつて、その冒頭の博士の撰に係る一文には、博士が東京滞在中に若き日の詩稿を一冊に整理してくれたものを郷里の故旧が見て「久離の感、再逢の情、油然として生起す。即ち携へて京中に入り、五峰・晚香二詞兄も亦た余の為に繩削し、遂に刪定して印に附す（原漢文）」とあって、この間の消息を少しく明らかにする。それによれば、博士がこの草稿「松雲詩草」を五峰に見せて添削を乞うたのは、東京でのことであり、その当時坂口五峰は牛込の戸塚の借宅を活動の拠点としていたのだから、博士はそこに草稿を持ち込んだのであつた。また、もう一人博士が『松雲詩草』の斧正を乞うたのは、晚香菊池三九郎であつた。晚香は早大教授も務めた人であつたので、学園でも博士と交流があつたと思われ、また文に秀でた人であつたので、以下に見るような「叙」から「引」への改稿に与つて力があつたかも知れない。換言すれば、五峰に提出されたのと同じような『松雲詩草』の清書原稿で、晚香が加朱したものが別に存したかも知れぬが、未だ寓目しない。

さて、「叙」から「引」に至る改稿の跡を辿る。まず「引」の全

文を記す。「引」も「叙」も白文のため、私に訓読を添え、然る後に改稿前の「叙」と比較する。

松雲生越後蒲原郡人幼習文少年坦蕩無他異耕暇耽詞章爲父兄所厭而生猶弗改常曰死且無悔既而爲某翁所養冒其氏丁年就兵役於仙臺役解遊東京遂歸鄉吟哦如故然生獨無師故其詩不能洗鍊以就典型頽唐自喜未幾遊北海道求耕漁之地蓋欲有修也而不得志悵然南歸見故舊嘆曰末技誤身吁命之盡也乃發憤棄詩稿去不知所之時辛卯冬歲二十八云後松雲之名杳無所聞今已十年矣鄉黨憐之集錄其詩古今體凡二百首詩之美醜不必擇人之存亡不必問也略爲繕寫以藏之云

明治三十三年庚子秋日

故舊同人 識

松雲生は越後蒲原郡の人なり。幼くして文を習ふ。少年、坦蕩として他の異無し。耕暇に詞章に耽る。父兄の厭ふ所と爲る。而れども生、猶ほ改めず。常に曰く、「死するも且つ悔ゆること無し。既にして某翁の養ふ所と爲りて、其の氏を冒す。丁年、兵役に仙台に就く。役解けて東京に遊ぶ。遂に郷に帰る。吟哦故の如し。生、独学にして師無し。故に其の詩洗鍊して以て典型に就くこと能はず。頽唐自喜ひと。未だ幾くもあらずして、北海道に遊びて、耕漁の地を求む。蓋し修する所有らんと欲すればなり。而るに志を得ず。悵然として南帰す。故旧を見て嘆じて曰く、末技もて身を誤る。吁命の尽くるなり、と。乃ち憤

りを發して詩稿を棄つ。去つて之く所を知らず。時に辛卯の冬歲二十八なりと云ふ。後に松雲の名、杳として聞く所無し。今已に十年なり矣。郷党之れを憐み其の詩古今体凡て二百首を集録す。詩の美醜は、必しも択ばず、人の存亡は、必しも問はざるなり。略ぼ爲に繕写して以て之れを蔵すと云ふ。

明治三十三年庚子秋日

故舊同人

博士は、明治十三年二月叔父旗野十一郎の養子となり、明治十七年には一旦この家を離れて復籍し、同年十二月に吉田家の養子となるというやや複雑な事情があった。「某翁の養ふ所と爲り、其氏を冒す」とあるのは、それぞれの養家に迷惑のかからぬようにとの配慮が窺われ、この文が博士自らの手に成るものであることを推察させる。先引の五峰の好評あることを思えば、全体が博士の詩作を抑えるに過ぎるようである。以て本文が博士自作である理由としたい。末の「郷党之を憐れむ」は、そこまで「頽唐」などと謙抑しすぎた自らの詩作への情熱を救い上げて『詩草』刊行の理由とするものである。

草稿、『小稿』の「叙」との比較に移る。それに先立って右白文引用文五行目中ほどの「乃發憤棄詩稿去不知所之」という傍線を私に付した文に關することで付言すべきことがある。当初筆者はこれを「乃發憤棄詩稿去、不知所之」と「去」字の下で読点をつけて、「乃ち憤りを發して詩稿を棄て去り、之く所を知らず」と訓じた。つまり「去」字を「棄」の補助動詞と捉えたのである。しかし、草稿と

『小稿』との「叙」を見るとどうやら博士は、これを「乃發憤棄詩稿、去不知所之」と「去」字の上に読点を付して「乃ち憤りを発して詩稿を棄て、去つて之く所を知らず」として「去」を動詞にして訓ませたかったらしい。補助動詞としての「去「來」はやや俗語的な表現であるが、詩歌にはまま見られるものである。「之」字があるので動詞としての「去」字は必ずしも必要でない。もしかしたら博士には漢文は文言で綴られるべきもので、俗語的表現は排除するという意識があったのかも知れぬ。

「叙」では冒頭の一文、「松雲生」に続けて「又號珠山樵者（又た珠山樵者と号す）」とある。次の「蒲原郡人」の下は「生在田舎。幼少習文（生まれて田舎に在り。幼少にして文を習ふ）」とあって、その下の「少年坦蕩無他異」が無い。「田舎」は漢籍に用例があって和臭の語ではないが、日本語としては通俗に墮したものであるので、田舎育ちという表現を「坦蕩」と言い換えたものであろう。次の「耕暇耽詞章」は「叙」では「耕耘之暇、好事讀誦最耽詞章（耕耘の暇、事を好んで誦讀し最も詞章に耽る）」とやや冗漫であったものを約めた。次文「爲父兄所厭、而生猶弗改」はもと「遂爲父老所厭、而無改悛（遂に父老の厭ふ所と爲るも、改悛すること無し）」であった。「常日」に続く部分は「叙」では「到死不悔（死に到るまで悔いず）」である。次の一文「既而爲某翁所養冒其氏」は草稿「叙」では「既爲某氏養子、改姓（既に某氏の養子と爲り、姓を改む）」となっているが、『小稿』「叙」では「到死不悔」の下に「既丁年徵爲兵赴仙

臺白下（既に丁年にして徵されて兵と爲り仙台城下に赴く）」とあった。養子縁組のことは言及されていなかったのが、『小稿』の「叙」であり、草稿「叙」と刊行された「引」では、この一条が付加されたのである。次の「引」で「役解遊東京遂歸郷吟哦如故」とあるのが、「叙」ではいずれも「役満遊東京。帰郷之後、吟哦如舊（役満ちて東京に遊び、帰郷の後も、吟哦すること旧の如し）」となっている。「満役期」ならよいが、「役満」は熟さないとの判断であろう。

次の「然生獨學無師故其詩不能洗鍊以就典型類唐自喜」は「叙」ではいずれも「但獨學無師性亦放縱故不能彫琢以就典型風格漸類唐（但だ独学にして師無く、性もまた放縱なり。故に彫琢して以て典型に就く能はず。風格漸く類唐）」となっていて、助辞が多く表現がややくどくなっている。推敲して「洗鍊」を加えたものと言えよう。「自喜」を添えることで、井蛙遼家の見に陥っていたことを自己批判するのである。「叙」では続く「未幾」が「乃」一字であったことが分かる。内容が大きく転換する箇所なのでやや改まった「未幾」を描いたのであろう。しばらく改稿無くして、「而不得志悵然南歸」の部分は「叙」には「悵然」の語がない。「引」はおおむね「叙」を約めているが、かように増補することもあった。次の「見故舊嘆曰」は「叙」では「逢故舊喟然曰」であり、「喟然」の大仰さを博士は厭うたのであろうか。「曰」の下の述懐文「叙」では「末技誤身久命之盡哉（末技の身を誤ること久し、命之れ尽きんかな）」となっている。同じ詠嘆調でも文末に「哉」を描く陳套を避けた。

続く部分は二種の「叙」に相違があり、ここでも『松雲小稿』の「叙」

が先に成り、五峰に呈した草稿の「叙」がそれに改稿を加えたものであることが確認できる。『小稿』には「棄詩稿」に類する表現はなく「哉」の下に「再去不知所嚮（再び去つて嚮ふ所を知らず）」

とある。この『小稿』の上層には書き入れがあって「棄稿草」「後松雲之名與詩杳無所聞」とある。前者には△があつて、「哉」の下に挿入する指示となつてゐる。後者には×があつて、「二十八云」の下に割り込ませるべしとする。つまり「引」の「乃發憤棄詩稿去不知所之」の部分が、『小稿』の「叙」の上層の指示で改稿されると、五峰に呈した草稿の「叙」の形になり、ここでは「棄稿草、去不審所嚮（稿草を棄てて、去つて嚮ふ所を審にせず）」となつてゐるのだ。「引」にある「發憤」の語は「叙」にはなかつた。「發憤」は宮刑に遭つた司馬遷が『史記』執筆を開始する際の語なので、これは言外に吉田博士が上京して、読売新聞記者となり、やがて不世出の歴史地理学者となつていったことを指示するのである。その過程で詩作に没頭することは断念したということであろう。『小稿』の後者の書き入れは「引」に生かされているが、結局ここでは詩集出版の「引」なので、「松雲之名與詩杳無所聞」の「興詩」は削除された。その後は「叙」では「迄今十年故舊憐之（今に迄るまで十年。故旧之を憐れみ）」となつていて、「其詩古今體凡二百首」が「叙」では「二百首」である。『松雲詩草』は当初百首程度の詩集とする構想であつたのである。以下「引」末尾の「略爲繕寫以藏之云」が「叙」

にはない。

三、坂口五峰添削草稿『松雲詩草』について

表紙に打ち付けに「五峰詞宗文壇下／請嚴正／庚戌十月初五／弟／吉田東伍／拜」と吉田博士の筆で書かれた『松雲詩草』については既に言及したが、詩本文には五峰の朱筆で、博士の詩句に点、圈、丸印、二重丸印、評語、改案がほぼすべての作品に施されてゐる。この全体の詳細は、別稿で紹介して論じるつもりであるが、今回は、五峰が『北越詩話』巻十や「吉田君を憶ふ」に記した詩についての具体的な裏付けとなる二、三の作例について見るに留めたい。後者の記事で五峰は「君の長所は古體第一絶句之に次ぎ、五律七律又之に次ぐといふ順序だ」と述べていた。そして「諸體兼備」とほめながらも、「君の律詩はまだ技工の上に缺くる所があるまで、習熟したなら或は絶句の上に出るかも知れぬ」と言つてゐるのだから、古詩に比べて、近体詩においては欠ける所があつたのである。つまり押韻平仄の規格が比較的ゆるやかな古詩において博士の詩才は發揮され、押韻平仄対聯の規格が厳格な律詩絶句ではやや未熟な点があつたということになる。

『詩草』冒頭は七言絶句「春暮偶成」であり、「庚辰」の干支があるので、明治十三年（一八八〇）博士十六歳の時の作ということになる。五峰に呈せられた草稿は左の通りである。

書き下しは私に付した。

西窓日永爐煙斜 西窓日永くして爐煙斜なり

斜引微風捲碧紗 斜めに微風を引いて碧紗を捲く

新緑満林春欲暮 新緑林に満ちて春暮れんと欲す

半牀書帙拂松花 半牀の書帙 松花を払ふ

韻字は「斜・紗・花」で下平声六麻。上層部に五峰は「爐は平」

と記す。確かにこのままだと起句の下三字「爐煙斜」がいずれも平

字となつてしまい、下三連の禁忌を犯す。この結果刊行された『詩

草』では「爐」字が仄字の「篆」字に改められている。承句の冒頭

は起句の末の韻字を重出させるが、これは古詩の蟬聯体の風を模し

たもので、囲炬裏から立ちのぼる煙が斜めにゆらめくのは、そよか

ぜが斜めに吹き込んだためであることを巧みに表現することに成功

していると判断したために意図的に破格としたのであろう。五峰は

不問に附している。承句下三字は刊本では「上淺紗」と改められて

いる。これは博士独自の推敲に係るであろう。転句の末一字を五峰

は「盡」に直すように指示している。博士は之を容れずに、「暮」

のまま印刷に付した。五峰は詩題の「春暮」と重出することを厭

うべきだとしたのであり、一理あるが、規格上の間違いではない。

結句は刊本では「半床書帙落松花」となっている。これも博士自ら

の推敲に係る。「牀」字を「床」字としたのは普及した活字を利用

すべきと判断されたのであって、字義に違いはない。「拂」を「落」

と変えたのは、一首の印象を大きく変えるものである。床の間に積

みあがった帙入りの書籍の上に落ちていた松の花を書斎の主が、手

で払い落とすというのは、人物が出てくるけれども、春の黄昏時の静

寂を破る。「落」とすると承句で詠ぜられた「微風」が運んで来た

「松花」をそつと「帙」の上に落とすという、動きはあるが書斎の

静寂を引き立たせる叙景で結ばれることとなって好ましい。

続いて草稿の「辛巳」の干支、明治十四年（一八八一）博士十七

歳の作から。「山居二首」の第一首である。

雨霽亂山殘靄青 雨霽れて乱山殘靄青し

溪聲濕夢讀書局 溪声夢を湿ほす 讀書の局

此間蓬戸無人問 此の間 蓬戸 人の問ふ無く

松子落時欹枕聽 松子落つる時 枕を^{そはだ}敬てて聴く

韻字は「青・局・聽」で下平声六青である。五峰は上層部に「第

二與第四句相妨（第二と第四と相ひ妨ぐ）」と記す。第二句で山中

の溪流の水音を詠じると第四句で松毬が落ちるかそけき音が聞こえ

なくなるはずだというのである。五峰は第二句の代案として「書窓

盡掩午睡醒（書窓尽く掩ひて午睡より醒む）」と記している。博士

は最終的に「明窓静坐閱茶經（明窓に静坐して茶經を閲す）」として、

印刷に付したのである。五峰は第四句の松毬が落ちる音を「溪声」

がかき消さないために意を用いたが、「書窓」を「尽く掩」うてし

まうと、今度は第一句の雨上がりの山容が見えなくなってしまうこ

とを失念した。そこに気づいた博士は、「明窓」と措いて、作中人

物が窓から「乱山」を望み見ることが出来る状況を設定したのであ

る。ただし五峰提案の「掩」字は、第三句を最終的に改めた「柴門不掩風鳴樹（柴門掩はず風樹を鳴らす）」に生かしている。そして第二句で五峰に従って抹消した「溪声」に代えて、第三句には「風樹を鳴らす」として「風声」を点じていることに着目したい。風が吹きやんだしじまに松毬が落ちたとしたら「風声」は第四句を妨げないとしたのであろう。同時に博士は結句下三字を「欹枕聽」から「停讀聽」として、必ずしも松毬の落下する音に耳をすましていたわけではなく、読書の折にふと気づいて聞き耳を立てたとしたのである。

五峰の書き入れや評語を見て、それを博士の最終稿と比べるに際して、筆者は少しく行間を読む試みをした。そうしなければ、「五峰は吉田博士の漢詩の先生であった」という吉田家に今日伝わる伝承の実態が理解されないと判断したからである。右の二首の絶句の添削を改稿過程を辿るだけでも明らかなのは、博士が「先生」五峰の意見に盲従していたわけではないということである。両者の火花を散らすような応酬は壯観を呈している。とるべきはとり、さらに反論すべきは反論して、五峰の意見を自らの推敲に生かしていた経緯が如実に看取されるのである。吉田博士の漢詩人としての自負は相当のものであったとしなくてはならない。

次は五峰が絶句に及ばないとした博士の律詩を見る。同じ十七歳の作「江村即事」である。詩題に朱で二重丸が施されているのだから、五峰は佳作と評価しつつも、専家の沽券にかけて改削を施した

ものであろう。

清江新漲拍汀沙 清江新たに漲りて汀沙を拍ち
満目春光挂紫霞 満目の春光紫霞を挂く
半片商帆夕陽水 半片の商帆夕陽の水
一竿酒旆杏花家 一竿の酒旆杏花の家
長堤曲々抱村遠 長堤曲々村を抱いて遠く
細徑遙々通市斜 細徑遙々市に通じて斜めなり
渡口無人晚來寂 渡口人無くして晚來寂たり
追群鷗鷺立蒹葭 群れを追うて鷗鷺蒹葭に立つ

韻字は「沙・霞・家・斜・葭」で下平声六麻である。五峰は写本上層部に「夕陽杏花不對（夕陽と杏花とは对せず）」という評語を記す。第三句の「夕陽」と第四句の「杏花」とはいささか次元の隔絶した景物であって対句を構成しないというのであろう。

第一聯。「清江」は、吉田博士が傾倒した杜甫の詩によく使われる語で、「江村」と題する詩に「清江一曲村を抱いて流る」という句があるのを意識したものであつたらうが、五峰はこれを棄てて「雨餘」の語を措けとする。「雨餘」は「雨後」に同じで、「餘」が平字、「後」が仄字なので、詩の中では平仄の関係で使い分けられる。続く「新漲」と「拍汀沙」とで活写される水の勢いというもの理由を明示するのである。刊本ではこの改案に従っている。続く第二句の「春光」と「挂紫霞」とを、五峰はそれぞれ「滄江」、「散綺霞」に置換すべきだとして、博士はこれにも従った。「滄江」は第一句

で「清江」を消したために、川全体に注意を喚起するためには必要な語であった。「散綺霞」は、「挂」よりも「散」としたほうが空間の広がりを感じしやすいということと「滄」字が含む青の色彩感が「紫」字と重なる弊を避けたのであろう。第二聯。第三句冒頭について、五峰は初め「半片商帆」を「十幅風帆」と改めるべきだとした後に、考え直して第三句全体を「畫槩盪春荻芽水（畫槩春を盪かす荻芽の水）」とすべきだとしたのである。代案呈示も容易な業ではない。襟を正して誠実に五峰が『松雲詩草』草稿を閲読していたことが知れる。博士はこの改案をほぼ受け入れて「畫槩嬉春荻芽水」を最終稿とした。それでも五峰の案の一字を替えていた。「盪春」であると雨で水かさ増した川の流れを美しい色合いの權で力強く漕いでいる感じになるが、「嬉」とすると漕いでいるかどうかは不問に附されて情景が静寂に包まれるであろう。

博士は静寂を好んだ。また上層の評語の「杏花」と「夕陽」とは対を成さないとの指摘が、「夕陽」の代案として「荻芽」を描くべきとしたことでダメを押されているわけであるが、これには素直に従われたのである。第四句で五峰は「一竿酒旆」を「青帘賣酒」とすべきだとした。博士はこれにも従った。原案も改案も、中唐、杜牧「清明」の「借問酒家何處有、牧童遙指杏花村」を踏まえるが、五峰の案は「畫」と「青」、「嬉春」と「賣酒」の対照性に留意したものであったことが納得できたので、博士は服膺したのであろう。

第三聯。五峰は第五句の「曲々」を「十里」とすべきだとした。

博士はこれを退けて最終稿を「長堤蟠曲抱村遠」とされた。博士が「曲」字に拘泥されたのは、眼前囑目の水景が実際に湾曲していたのであろうし、杜甫の句の「清江一曲抱村流」を利かせていることを強調しなかったゆえだと推察される。第六句。五峰は「遙々」を「一條」とすべきだとしたが、これは前句を「十里」と改めた場合に対を成すための案であるから、既に「十里」を退けたのであれば、最終案の「蟠曲」と対を成す語でなくてはならず、その結果、「細徑蛇行通市斜」としたのである。

最終聯。第七句に五峰は添削を施さぬ。第八句については五峰は「群鷗呼侶立蒹葭」とすべきだとした。確かに草稿のままであると、「追群」という動きのある語と静止状態を表現する「立」字とが矛盾を来す。五峰の「鷗鷺」を「鷗」だけとして、静止図とすべきだとする提案に、博士は従っているが、五峰案を鵜呑みにはしない。「貪眠鷗對倦飛鴉（眠りを貪る鷗は対す 飛ぶに倦るる鴉に）」というのが最終案である。「鷗」も「鴉」も水上に舞い降りてやすらうているが、「鷺」を消した代わりに韻字でもある「鴉」を点じたところに漢詩人吉田東伍の負けじ魂を見る。

絶句、律詩を見ると五峰は、存分に博士の詩句に添削を施していることが看取された。特に律詩について五峰は完膚無きまでに朱筆を加えており、これは草稿『松雲詩草』全体の傾向ともなっている。このことは先に引用した「吉田君を憶ふ」の古詩第一、絶句がこれに次ぎ、律詩は未だしとする評価に呼応する。しからは、最も博士

が秀でるとする古詩について、五峰はどのような批評を書き付けたのか。ここでは諸家絶賛の「金陵行」一篇を紹介するに留める。「金陵行」は刊本の詩題であり、草稿では「甲申二月讀史到道光咸豐亂慨然有金陵行之作」という長い詩題であった。五峰はこれを「金陵行」という詩題と「甲申（中略）慨然作之」という引とに分けるように提案している。実は草稿において、詩題をかく改めることを指示する朱筆が施されている外、詩本文には二か所の朱字訂正と評価を意味する傍点の他ほとんど五峰は加朱せぬのである。古詩「金陵行」を間然する所がない傑作と五峰は見做していた。

歴陽樹低三山開 歴陽樹低くくして三山開く

龍虎百戰勢雄哉 龍虎百戦して勢い雄なるかな

王氣金陵破未盡 王氣金陵破れども未だ尽きず

天花如雨留空臺 天花雨の如く空台に濺ぐ

救世之主洪氏子 救世の主洪氏子

七日昇天起於死 七日天に昇りて死より起つ

三十六鐘照湖山 三十六鐘湖山を照らす

樓船夜下長江水 樓船夜下る長江の水

嶺外難回林青天 嶺外回らし難し林青の天

百城失守及趙燕 百城守を失して趙燕に及ぶ

燕山朝廷狼狽甚 燕山の朝廷狼狽すること甚だし

禹域南北塵氛填 禹域の南北塵氛填む

誰言粵人似封豨 誰か言はん粵人は豨に似たるを

進止不免慕羶螻 進止羶螻を慕ふを免れず

南京十年且儉安 南京十年且く儉安す

蛇脊斬絶纒掉尾 蛇脊斬絶せられて纒かに尾を掉る

楚湘義勇殺賊興 楚湘の義勇賊を殺して興つ

制勝名將推姓曾 勝ちを制する名將姓曾を推す

成敗由来各自取 成敗由来各自に取り

滿漢興亡非天數 滿漢の興亡天數に非ず

君不見遺甲廿五動瀋遼 君見ずや遺甲十三瀋遼を動かすを

中原草木秋蕭々 中原の草木秋蕭々

北風吹江朱火滅 北風江を吹いて朱火滅し

列代衣冠永灰銷 列代の衣冠永へに灰銷す

太平天國名徒美 太平天國名のみ徒らに美なり

頭髮雖長非前朝 頭髮長しと雖も前朝に非ず

本詩は清末の大規模な宗教反乱として名高い太平天国の乱の中心の舞台となった「金陵」＝南京を詠じた七言古詩であり、換韻が五か所に認められ、内容が六段に分かれる。韻字は「開・哉・臺」（上平声十灰）、「子・死・水」（上声四紙）、「天・燕・填」（下平声一先）「興・曾・教」（下平声十蒸と去声七遇との通押）、「遼・蕭・銷・朝」（下平声二蕭）。

五峰もまた交際のあった田辺碧堂や国分青厓と同じく、詠史詩に本領があったとされる（石川淳『諸國畸人傳』「阪口五峰」）が、その詠史詩の名手が太平天国の乱を詠じた「金陵行」を絶賛したので

あった。

詩は初めに陥落した後の南京を詠じ、転じて反乱の首魁洪秀全が長病の床で夢を見てキリスト教に目覚めて起ちあがり、滅満興漢を旗印に、北京の朝廷を脅かし、南京を陥落させて天京を置き、やがて曾国藩、李鴻章の湘軍、淮軍に鎮定されるまでを活写する。博士が従軍記者として中国に赴くのは明治二十八年のことだから、この詩における情報は新聞などで得たもので、それを織り込んだものと思われる。

五峰の朱は「成敗由來各自取」句の「各自取」を「人自取」とし、「君不見」の長句の「廿五」を「十三」に替えるのみであり、博士もそれに従っておられる。ただ、初めから四句目の「留空臺」の「留」字が刊本では「濺」字となっているのと、末の二句が刊本では「太平天国片時夢、獨使詞客傷六朝（太平天国片時の夢、独り詞客をして六朝を傷ましむ）」となっている。博士自らの推敲に係るか、菊池晩香の提案に由るものと思われる。こうすれば、後者には晩唐、韋莊の「過金陵」の「六朝夢の如く鳥空しく鳴く」（『唐宋聯珠詩格』）が、前者には盛唐、杜甫「春望」の「別れを惜しみては花にも涙を濺ぐ」（『唐詩選』）が想起されて、味わいを増すので推敲してさらによくくなったと思える。特に結句は辮髪を描いた新聞記者的な精緻な観察を棄てて、詠史詩特有の歴史的感慨を餘情とする見事な改変であった。